

## 東北・関東（東日本）大震災 ＝何ができるのか、ともに考えたい＝

「闇が深ければ深いほど、小さな光が明るく輝く」——十六年前の阪神・淡路大震災の被災地で語られていた言葉です。失意の被災者には、全国のボランティアの「利他」と「相互扶助」の熱い思いが、かけがえのない励ましました。一人ひとりでは微力でも、被災者と結ぶ「心の絆」は大きな力になります。A V Cは、その教訓を未来に生かそうと震災直後に設立した団体です。

巨大地震、大津波と原発の恐怖。今回の東日本大震災は、人類史的な大災害です。何十万人にも上る被災者が三重、四重のむごい仕打ちに直面しています。痛切な悲しみ、喪失感、憤りを癒やすには、阪神・淡路大震災以上に人々の「心の絆」を結び合わせる努力が求められます。

それらのことを念頭に置き、A V Cは次の二点を目的に、この大災害の被災地への支援活動を進めたいと思います。ご協力いただきますようお願いします。

◇「小さな光」を灯し続けるため一人ひとりが何をできるのか、ともに考え、行動する。

◇空前の不幸をもたらした理不尽、不条理な社会の仕組みを掘り下げ、変革を訴える。

### 痛みを共有する支援活動にご参加ください

災害は、その社会に潜む様々なひずみや弱点をあぶりだします。今回の被災地の多くは、人口流出に悩む東北の太平洋沿岸地域でした。被災地では大規模な救援活動が行われています。しかし、差し迫った状況が一段落しても、問題は解決しません。地域の崩壊が一気に進みます。

A V Cには、被災地に所在し、救援活動しているキリスト教会やYMCA、日本ユネスコ協会連盟、阪神・淡路大震災を経験したNGOなど数々のネットワークがあります。各団体を通して現地の状況を掌握し、迅速・的確な支援が可能です。ただ、時間の経過とともに被災地では新たなニーズが次々と発生してきます。A V Cは緊急救援の次の段階も見据え、被災地の声に耳を澄ましつつ、それぞれのニーズに優先順位をつけ、身の丈に合った息の長い支援を続けます。

優先順位はA V Cの理念に沿い、支援参加者の総意に基づいて判断します。第一段階は、親を失うなど心に深い傷を負った子どもたちの「癒し」に力を入れる方針です。精神医学の専門家の現地調査を踏まえ、上記協力団体とも連携して支援対象を絞り込みます。同様の大災害に見舞われた国々の子どもたちと交流し、辛い体験を分かち合う「癒しの旅」も構想しています。

A V Cは設立以来十五年間、『連帯』をキーワードに経済・社会的な格差と不公正に苦しむ開発途上諸国の草の根の民衆と「心の絆」を結び合う努力を重ねてきました。今後、震災の被災地では、途上国の構造的諸問題と通じる事態が進行するものと予想されます。A V Cは、中・長期的な活動に取り組む中で、そのことを明らかにします。緊急に「一人ひとりが何をできるのか」「何が問われているのか」をテーマに、ともに考える報告会なども開催します。知恵を結集し、多様なチャンネルを駆使して被災地支援と社会変革へのメッセージを発信し続けます。

震災救援募金にぜひご協力くださるよう、お願いいたします。

2011年3月28日

特定非営利活動法人アジアボランティアセンター 代表 平田 哲